

第55回中学生作文コンクール

都道府県別賞一等

最後のプレゼント

長崎県 長崎大学教育学部附属中学校 三学年

平林 万奈満

今年七月五日、六日。三十六名もの尊い命が突然失われた。皆さんも記憶に新しいのではないだろうか。これは、今私が暮らしている九州北部で起こった平成二十九年七月九州北部豪雨のことだ。長崎では被害はあまりなかったが、被害が大きかった地域では今なお行方不明者の捜索が続いている。

皆さんは、もし今この瞬間災害や事件が起きて、自分もしくは自分の大切に行っている人が突然亡くなったらどうするだろうか。だいたいの方は、「そんなことは起きるはずがない」とか、「対策をしているから大丈夫」などと、この問題をまともに考えもしないだろう。だが実際に、突然命を奪われるような悲惨なことが私達の近くで発生してしまっている。

九州北部豪雨の死者の中に、子連れの妊娠した一人の女性の方がいる。その女性は、我が子だけでも守ろうと、最後まで、強く抱きしめたまま亡くなっていったそうだ。その子供も亡くなってしまったが、何か強く心に突き刺さるものがあった。よく、

「六十歳まで生きればもういいや。」
とか、

「あんまり長生きしたくないなあ。」
と言う人がいるけれど、その犠牲になった方々のように生きたくても生きられなかった人や、生かしてあげたかったけれど生かせられなかった人もいる。私はその方々のような気持ちを重く心に受け止め、できる限りの備えをし、生きていくことが大事だと思った。

その備えの一つとして、“生命保険”というものがある。今現在、約二秒に一人新しく入院したり、約五十九秒に一件交通事故が起き、年間四、一七人の方が亡くなっている。そのような時に、私達に寄り添ってくれるのが生命保険なのだそうだ。今では、十世帯あたり九世帯ほどが加入している。だが本当に、自分あるいは家族の生命保険について正しく理解しているだろうか。例えば、男性の平均保険料は年間で二二・八万円だ。これを二十五歳から男性の平均寿命である、八十歳まで払い続けるとすると、一、二五四万円となる。

第55回中学生作文コンクール

これは、私達子供一人が大学までにかかる学費に匹敵する。そんな大事なお金を、保険の内容を正しく理解しないまま、人から勧められるばかりに決めていいのだろうか。

私達は今「未来」に向かって生きている。今この瞬間誕生する小さな命もあれば、消えゆく命もある。私達はそんなわからない未来、そして、自分のまわりにいる人のために生命保険をかけている。私は今中学三年生であるが、生命保険への知識は浅いものだ。実を言えばこの作文を書く時も何度も手が止まり、生命保険について調べた。私のように、あまり知識を持っていない人も多いのではないだろうか。

私の祖母は今年の六月にガンで亡くなった。進行が早く、私達家族としては心の準備ができていなかったけど、祖母が生命保険に加入していて、葬儀代やお墓代などのお金のことを気にする必要はなかったし、生命保険は、祖母が残した私達への最後のプレゼントだったと思う。だが、家族がそのプレゼントを知らずに、受け取ってもらえなかったらどのような気持ちになるだろうか。

もう一度、皆さんに聞きたい。もし今この瞬間、自分もしくは自分の大切にしている人が突然亡くなったらどうするだろうか。準備あれば憂いなし」という言葉があるように、もしもの時を考えて行動しておけば、万が一のとき、家族を少しかもしれないけれど安心させることができると思う。

私は二年前に放送された『あさが来た』を見て、生命保険に興味を持った。私のような中学生でもドラマや簡単な小説だと生命保険について知るきっかけになると思う。知らなければ行動できないようなことも、そのような機会を通して行動できる。私はとても大事なことだと思う。最後のプレゼントを受けとったり、渡したりする一人として、些細なことから生命保険について皆さんに知ってもらいたい。